九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

資本蓄積と貧困化理論（一）

近江谷, 左馬之介

https://doi.org/10.15017/4362436

出版情報：經濟學研究. 22 (4), pp.1-22, 1956-12-20. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

資本制蓄積と貧困化理論（一）

近江谷 左馬之介

目次

一、問題の提起
二、資本制蓄積の一般的法則（以上本号）
三、貧困化理論について
四、資本制蓄積と貧困化理論

*

資本論第一巻第二十三章『資本制蓄積の一般的法則』でとりあつかはれている問題は、マルクスじしんの言葉をかりると、蓄積の「労働者階級の運命におよぼす影響」(1)であり、いいかえれば蓄積の進行がどのように労働者階級の一般的な社会的地位を決定してゆくかがここでの問題のおもな対象をなしている、ということについてはおそらくなんぴとも異議をはさまないであろう。しかしまた現実にはこの問題がいわゆる『貧困化理論』というかたちで、つまり労働者階級は蓄積にともなつて貧困化するかいなか、また貧困が進むと考えるばあいにもそれが相対的な意味においてそうなのであるか、

それとも絶対的に貧困化するのか、という点にとくに焦点があわされて論じられている、ということも事実であろう。そもそも『貧困化理論』という言葉は、カウツキーがその著『ベルンシュタインと社会民主党綱領』のなかで指摘しているように、(2)『崩壊理論』だとか『破局理論（カタストロフ）』だとかいう語がそうであるように、マルクシズムの固有の使用語ではなくてむしろその批判者たちがつくりだした新語である。もちろん言葉がだれに由来しようとそのことじしんにはべつに重要な意味があるわけではない。けれども蓄積の一般法則の問題の中心にいわゆる『貧困化理論』なるものをすえたのはほかならない修正主義者であつたということ、いいかえればマルクシズムの批判として提起されたひとつの観点が逆に問題そのものの中心におかれるようになつたという点は無視することができないのである。また修正主義者の側からするこの批判がたんに理論的主張にとどまるものではなくて、ドイツ社会民主党の綱領批判として提起された政治的主張をふくむものであつたから、投じられた一石は国際的にも大きな波らんをまきおこし、それだけにまた貧困化理論はいよいよ大きな脚光をあびることにもなつたのである。

ベルンシュタインによるマルクシズムの修正は『社会主義の諸前提と社会民主党の諸任務』において展開されているが、そのなかでかれは『貧困理論はといえばかなり一般的に放棄されてしまつている。もつともてつてい的にかつ直接的にすてさられたというわけではなく、少くともその帰結をできるだけはぐらかすというやりかたによつてではあるが(3)』とのべ、その脚注ではややくわしい説明をあたえている。少しながく引用するとつぎのようである。(4)

「こういう説明をはぐらかすくわだてをH・クーノーはかれの崩壊論文のなかでやつている。マルクスは『資本論』第

一巻のおわりのところで資本制生産の進行とともにすすむ『貧困の度合の増大』について語つてはいるけれども、このことは、とかれ〔クーノーのこと―引用者〕はのべている、『労動者の経済的生存状態のたんに絶対的な後退を』意味するものではなく、『進歩する文化的発展に比較しての、したがつて生産性の増大や一般的な文化的欲求に比較しての後退』と解すべきである、と。どうやら貧困の概念は確乎としたものではないらしい。『『雇主』と教養のうえでいちぢるしいひらきのある一定部類の労働者にとつて望ましい状態と思はれるものは、精神的には『雇主』よりたぶんすぐれているであろう他の部類の有能な労働者にとつてははなはだしい『貧困や抑圧』と思はれ、かれはこの状態に立腹して反抗するのである』(『ノイエ・ツァイト』第十七巻、第一号、四〇二―三頁)と。

残念ながらマルクスは当該の文章のなかでは、たんに貧困、抑圧の度合の増大にかんして語つているだけでなく、『隷従、堕落、搾取』の度合の増大についてものべているのである。そこでわれわれはこれらのすべてをさきにみたような――わけのわからぬ意味に解すべきだろうか。たとえば労働者の堕落をとつてみても、それは一般的な教化の向上に比較してのたんなる相対的な堕落にすぎないものであろうか。わたしはそうだとは思はないし、おそらくクーノーもそうは考えないであろう。いや、マルクスは当該の箇所ではつきり明言している。資本制的転化過程の『あらゆる利益』を『収奪』する『大資本家の数はたえず減少』し、『貧困、抑圧の度合は増大』する、などと。……

ついでながらいうと、わたしはクーノーが崩壊理論の基礎をなすこの命題を現実とどういうふうに調和させるか、をみて心安んじた。というのはかれはもともとちがう社会概念をもつて、なんの脈絡もなしにさまざまな部類の労働者を登場

させることによつてのみかかる調和にたどりつくことができたからである。』

みぎの引用からもうかがはれるように、ベルンシュタインのこのような修正意見の背後には、十九世紀後半における労働者の実質賃銀の上昇という現実があつたことはことさらここで指摘するまでもないことであろう。そしてかれにとつては、この事実こそは資本制蓄積の一般的法則の、あるいはかれによつてこの法則の帰結でありまたこれを総括するものと考えられた貧困化理論の破産を宣告するものであつたのである。

これにたいしてカウツキーはベルンシュタインの同書からみぎと同じ引用をひいてから、『ベルンシュタインのばあいには、貧困を生理的現象としてでなく社会的現象と解することが、とりもなおさず言葉の意味をわけのわからぬものとすることらしい』(5)とのべ、かれの貧困化理論をつぎのように要約している。

『この理論は富の増加の一部分が労動階級にも帰属するということをけつして排除するものではない。もちろん資本制生産様式は賃労働者階級やそのほかの人民大衆を圧しさげるという傾向をつねにもつているし、またそれによつていつも新たな貧困をうみだすのであるが、貧困を制限しようとつとめる傾向もうみだすのである。たえず増大するのは生理的貧困ではなくて社会的な貧困、すなわち文化的欲求とそれを充足すべき個々の労働者の手段とのあいだの対立である。いいかえれば、労働者のひとりあたりに帰する生産物の量は増加しうるが、かれによつてつくりだされた生産物量にたいする労働者のわけまえは減少する』(6)と。ここに展開されているかれの見解はのちに『相対的』貧困化理論と名づけられたものであることはいうまでもない。すなわちベルンシュタインが生理的貧困の観点から蓄積の一般的法則を否認したのにたい

して、カウツキーは社会的貧困の立場に立つことによつて、いいかえればブルジョワジーの生活水準の向上にたいするプロレタリアートのそれのたちおくれが両者のあいだの社会的対立を増大せしめるという観点からこの法則の妥当性を主張するのである。

このカウツキーの見解にたいしてもそののちさまざまな多くの批判がなされたのであるが、われわれはまずその典型のひとつとしてブハーリンをあげることができる。ブハーリンはコミンテルン第四回世界大会の綱領討論会において、カウツキーの相対的貧困化理論は『マルクスじしんが提出したものより温和な形態』(7)をとつており、それは修正派への降伏にほかならないと指弾してから左のごとき説明をあたえるのである。

『……マルクスは資本主義的発展の内在的法則が労働者階級の状態の悪化にみちびく、ということを主張している。しかしカウツキーのマルクシズムはどうであろうか。それは労働者階級をもつぱら大陸の労働者階級と解している。プロレタリアートのこの層の状態はますます改善されてきた。しかしカウツキーのマルクシズムは大陸の労働者階級の状態のこのような改善が植民地の人民の根絶や掠奪の犠牲においてあがなわれたものであるという事情をみのがしたのである。マルクスは資本主義社会全体をとりあげた。もしわれわれがマルクスよりもいま少し具体的であらうと思うなら、たんにアメリカ＝ヨーロッパの範囲を考察にひきいれるにとどまらず、全世界経済を考察せねばならない。そうすればカウツキーやその従党のえがいたのとはまつたく異つた理論像をうるであろう』(8)と。

ブハーリンのこの説明は独得なものであるけれども、そののちあらはれたカウツキー批判がさまざまなニュアンスをも

つてではあるがその相対的貧困化の論点に集中されている点では、そのたの諸見解と軌をいつにする。われわれはこれらの主張を通例によつて絶対的貧困化理論[9]と呼ぶことにしよう。

貧困化理論の素描についてはここではこれ以上くわしくふれる必要はないであろう。それもいままでにすでにいくつかの紹介がなされている、というだけではなしに、はじめにのべたように、ここでは資本制蓄積の一般的法則がベルンシュタインいらい一貫して貧困化理論を中心に論じられている、ということを確認しさえすればよいからである。あるいは相対的貧困化によつて蓄積の法則を擁護し、あるいは絶対的貧困化をもつていわゆる改良主義的見解を批判するのであるが、そのいずれにあつても一般的法則が資本論のなかでどのような理論的取扱いをうけているか、という点についてはじゆうぶんな反省がなされていないように思はれるのである。この法則が資本主義社会の階級関係やプロレタリア革命にかんするマルクス＝レーニン主義の基礎となつている、とかりになん度くりかえしてみたところでそれだけではそもそもこの法則のもつ意味も納得できないのではないか、と考えるのである。そしてまたこの法則との関連において貧困化理論を吟味するという労をおこつたつて、はじめから労働者階級の生活状態が向上するか、しないかと論議をかさねるのはマルクスの真意にもとるのではないか、とすら思はれるのである。そこでこの法則についてじやつかんの考察をなしてから、いまいち度いわゆる貧困化の問題にかえりたいと思う。

（1） K. Marx, "Das Kapital", Bd. I, Dietz Verlag, Berlin 1953, S. 643 向坂訳第四分冊九十二頁。

（2） K. Kautsky, "Bernstein und das Sozialdemokratische Programm", Stuttgart, 1899. S. 114.

(3) Ed. Bernstein, "Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie", Stuttgart, 1899, S. 148.

(4) Bernstein, A. a. O. S. 148—9.

(5) Kautsky, A. a. O. S. 119.

(6) Kautsky, A. a. O. S. 128.

(7) "Materialien zur Frage des Programms der Kommunistischen Internationale". Verlag d. komm. Inter., Hamburg, 1924. S. 99.

(8) A. a. O. S. 99.

(9) 戦前の絶対的貧困化理論の文献としては、Tolokonski-Nowitzki-Jakobsohn, "Das allgemeine Gesetz von der Kapitalistischen Akkumulation" (Unter den Banner des Marxismus. Jrg. Ⅳ. Heft. I. 1930) も参照さるべきであろうが、目下手許にないので利用しえない。横山正彦『経済学の基盤』一九五五年の当該箇所の説明をみられたい。拙稿『二つの窮乏化理論』(「社会科学研究」第三巻第一号。一九五一年)もじやつかんの参考となろう。

*　　　　*

資本の蓄積が前貸資本を補塡するに必要な分量以上にでる追加的な生産手段、生活手段の生産であり、いいかえれば剰余価値の一部分の資本への再転化であることはいうまでもないことであろう。しかしながらまたこの資本の蓄積がたんに財貨の蓄積にすぎないものでもなく、その背後には資本関係の拡大再生産がふくまれているということも明らかなことであろう。資本主義社会においても社会の存続のためには、他のあらゆる社会においてそうであるように、ひとは自然にはたらきかけて物資を獲得し、これを消費することによつて自己を再生産する、という関係が実現されなければならないこ

とはここでとりあげてのべるまでもないことである。ただこのばあい問題となるのはこの労働ファンドの生産も、その消費も直接のかたちでは行はれえないということである。一般に労働力の再生産を考えるさい、われわれは労働力の販売によつて貨幣（賃銀）をえ、それをもつて市場で生活必需品を購入し、これを消費することによつて労働力を再生産する、という過程を頭にうかべるのであるが、しかしその過程はここに形式的にしめされているような単純な商品流通（A―G―W）にすぎぬものではけつしてない。あたかもこの形式では労働力は貨幣を媒介として生活手段と交換されるかのごとき外観をていすのであつて、それゆえに生活手段は労働者にたいして外部からあたえられたもののごとくみえるのであるが、事実はこの生活手段そのものもじつは労働者の生産した労働ファンドにほかならない。すなわち労働者はじぶんの労働の生産物を商品として買いもどす、という関係にたつのである。そしてこのような関係が成立する、というのも労働力が商品化して、その労働が他人の生産物に対象化されているからである。いいかえればさきの定式は資本の生産過程を無視しては理解できないものである。生活手段が市場で労働者に商品として対立するのは、労働者がさきの流通過程の第一段階において自己の労働力を商品として資本（可変資本）に対立させているからである。このようにして資本に対立した労働力は購入の過程をへて生産資本の一構成部分として資本の流通のなかにふくめられ、同様に流通過程を通じてとりいれられた生産手段（不変資本）と結合せられる。この生産資本の機能は剰余価値をふくむ生産物の生産であり、生産せられた生産物は商品資本として資本の流通の最終段階たる貨幣資本への転換の完了にのぞむのである。A―G―Wなる流通過程の最終段階に登場している商品はこのような資本の生産過程を（正確にいえば前期の）へた商品であり、資本にとつて

はその流通の最終段階にのぞむ商品資本にほかならない。要するにこの商品資本の実現はさきに労働力および生産手段の購入に支出した貨幣資本の回収と剰余価値の現物形態からの貨幣形態への転換であつて、資本家にふたたび生産過程の反覆とかれらの生活手段の購入を可能ならしめる過程である。と同時にこの過程は労働者にとつては賃銀をもつてする生活手段の購入であつて、その消費によつてかれの労働力は再生産されるのである。このように同一の過程があい対応した二重の過程を果しうるというのも、それはすでにさきの労働力の売買という単純な商品流通に属する一事象が同時に資本の流通に属する機能的に規定せられた一段階を形成しているからである。いいかえれば労働者がその労働ファンドを獲得する過程が資本の運動に包摂され、これに附随する過程として展開されるからである。

もちろん現実には事態はかくのごとく単純なものではない。労働者はたんに生活手段を生産するばかりでなく、これを生産する手段をも生産せねばならない。また労働者の消費対象とはならない奢侈品を生産する労働者もいることであろう。しかしいずれのばあいにも資本家にとつては生産物の販売は労働力や生産手段の購入に支出した貨幣資本の回収であり、またかれにとつて消費ファンド、もしくは蓄積ファンドとして役立つ剰余価値の実現にほかならない。かりにこの生産物が生産手段であつても、その販売によつてえた貨幣の一部分は労働者やかれじしんの生活手段の購入にむけられる。かれらはこの貨幣をもつて市場で必要とする商品を購入すればよいのである。要するに個々の労働者や資本家でなく、階級としてのかれらを考えればけつきよくは以上の関係に変更をくわえる必要はないのである。

そこで以上を要約すれば、いままでにのべたことからつぎのような結論がひきだされるであろう。労働者は自己の労

働ファンドを直接に消費することはできないのであつて、資本家に雇傭されて、価値を生産することによつて、すなわち生産手段の価値を生産物に移転し、自己の労働力の価値に等しい価値をあらたに生産するだけでなく、それ以上の剰余価値を生産することによつて、このような『廻り道』をたどることによつて、労働ファンドを消費することができるということ。いいかえれば、労働者は資本を再生産することによつて、それゆえまた資本家の生活の物的基礎である剰余価値を再生産することによつて、じぶん自身を賃労働者として再生産するということ。だから再生産はたんに資本の物的な再生産にすぎぬものではなくて、資本関係じたいの再生産にほかならないということ、がすなわちこれである。

資本蓄積のばあいにもこのような関係が基本規定としてそのうちに含蓄せられていることはいうまでもないことである。ただこのばあいには労働者は、かれらのより多くの剰余労働を搾取するより多くの資本をみずから生産する、という点がまえの単純再生産のばあいとはことなるのである。すなわち過去における労働者の労働が現在の生ける労働をより多く搾取する物財的手段となるのである。より具体的にいえば剰余価値の一部分は追加的生産＝生活手段のかたちで存在し、あらたなる追加的労働力の剰余労働を吸収すべきものとしてある。しかしここで問題となるのはかかる追加的労働力がいかにして補充せられるか、という一点である。追加的生産手段はいうまでもないが、追加的生活手段の存在にしても、それは直接に追加的労働力の存在を意味するものではない。一般に過去における労働者の労働の生産物は労働者の個人的生活のための物財とはなるが、資本家によつて雇傭される労働者そのものとはぜんぜんことなるものであることはいうまでもないことである。追加的生活手段も追加的労働者によつて購入せらるべき商品であるにすぎない。いいかえれ

ば労働力の再生産が資本の運動に包摂せられて行はれる、というまえにみた関係にはかわりないのであるが、この関係が社会的に拡大してゆく過程を追求するばあいには、この立場だけからではじゆうぶんに解明することのできない追加的労働力そのものの補充の問題が生じてくるのである。ただ「いまこの構成部分（追加的生産＝生活手段のこと—引用者）を実際に資本として機能させるためには、資本家階級は労働の追加を必要とする。すでに使用されている労働者の搾取が外延的または内包的に増大しないものとすれば、追加的労働力がとりいれられねばならない。そのためにもまた資本制的生産の機構はすでに用意をととのえている。すなわちこの機構は労働者階級を労働賃銀に依存する階級として再生産し、かれらのふつうの賃銀はかれらの生存のみではなく、かれらの増殖をも保証するにたりるものだからである」（資本論ディーッ版第一巻六〇九—六一〇頁。向坂訳第四分冊三五—三六頁）というだけではぢゆうぶんな説明とはいえないであろう。いいかえればこれまでの観点からこの問題に答えようとすれば、追加的労働力の生産は労働者の自然的増殖にゆだねられているという説明にとどまらざるをえないのである。もちろん労働人口の増加もけつきよくはその自然的増殖に帰するほかはないがしかし蓄積の過程はかかる自然的増殖によつてなされてきたのではない。むしろ資本はこのような自然的増殖から独立した人口法則を蓄積の機構によつてうみだすことによつて行つてきたのである。この点の考察こそとりもなおさず資本制蓄積の一般的法則の課題である。そしてまたこの問いの解明をまつて蓄積の過程が現実的に把握せられることともなるのである。

資本蓄積の累進的増進が資本家にとつては競争の外部的強制法則によつて生産の絶対的な目標となる、ということはあ

らためて指摘するまでもないことであろう。かかる蓄積の増進はたんに資本家の『禁欲』によつて行はれるというようなものではない。むしろそのような個人的な方法から独立した客観的な方法としてそれじしんでは自動的に無制限に行はれうるものである。すなわち労働の社会的生産力の発展は資本の生産力の増進として、資本の量と価値とが設ける制限をこえて際限なく膨脹しうる力能を無償で資本にあたえるのである。一般に資本制的生産方法の発展は資本の有機的構成の高度化としてあらはれるのであるが、またこの高度化の結果としての蓄積の増進は高度化をさらに高める原因となり、この過程は蓄積と高度化の加速度的増進をもたらすのである。この過程が不変資本の増大程度にたいしての可変資本の相対的減少を意味することはいうまでもないことであろう。

しかしまた生産方法の発展のうちにはひとつの矛盾がふくまれていることも明らかである。すなわちこのような発展は剰余価値量を規定する二つの要因のうち、そのひとつである剰余価値率を大きくするために他の要因である労働力の量を相対的に――もちろん資本の大いさをあたえられたものとすれば絶対的に――減少させねばならないからである。この内在的矛盾は新らたな生産方法の普及がこの方法による価値を規制的な社会的価値たらしめるやいなや発現し、あたえられた技術的基礎のうえでなされるたんなる量的な拡張によつてこの生産方法の発展が中断されることになるのである。

このばあいには蓄積の増進は明らかに労働力にたいする需要を絶対的に増大するのであつて、この需要が絶対的に増大すれば、それゆえに賃銀は騰貴する、という事態をまねきうるのである。しかしこの傾向がじつさいに剰余価値率を低落せしめ、さらに資本の過剰蓄積をもたらす点にまでゆきつくと、そもそも蓄積はこれまでの資本関係のもとでこれ以上

継続することができなくなり、蓄積はおとろえ、賃銀は低落する。そしてより高度なる生産方法を基礎とするあらたなる資本関係の形成の過程においてふたたび蓄積の増進が行はれることになるのである。

以上のごとき蓄積の運動はあるいは「労働力または労働者人口の絶対的増加または比例的増加の減退が資本を過剰」(前出六五一頁、訳本一〇六頁)ならしめるかのごとき、あるいはそれの「増進が資本を不十分」(前出、同上)ならしめるかのごとき外観をていするのであるが、しかし事実はそのような自然的人口と資本量との相対的な関係で蓄積運動がなされるのではない。まえのばあいは「資本の増加が搾取されうる労働力を不十分」(前出、同上)とし、あとのばあいは「資本の減少が搾取されうる労働力またむしろその価格を過剰」(前出、同上)ならしめるのである。いいかえれば資本に充用さるべき労働力は商品として購入されるのであり、そのかぎりでは需給関係はその価格変動としてあらはれるのであるが、しかしそれは資本にとつて価値増殖手段としての商品である。それゆえに資本の価値増殖欲がその需要を減少するときはあたえられた労働人口やその増殖程度のいかんにかかわらず労働力はよりわずかしか資本に吸収されない。他の事情にしてかわりないとすれば賃銀はこのばあい低落する、ということは明らかである。またこの商品はのちにのべる相対的過剰人口によつて資本の需要によつては価格騰貴をともないながら供給を増加しうるのであるが、この価格騰貴が反対の方向での需給関係の不一致をよびおこし価格低落をともなうということではない。むしろ需給関係の変化そのものが資本の蓄積運動によつて規定されるという点が問題なのである。このばあいには労働力の価格は蓄積を制約するものとして作用するのであつて、蓄積にともなう賃銀の騰貴はすでにみたように剰余価値率を低落せしめ、ひいては蓄積の進行をおしとど

めるのである。けれどもこのばあいにもけつきよくは資本の価値増殖欲が資本と労働力とのあいだの不均衡を回復せしめるのであつて、自然的人口やその増殖率が資本の量と均衡するわけではない。いいかえれば労働力量の側の運動は蓄積のそれの反映にすぎない。それは資本の価値増殖欲によつて索引、反撥を規定される搾取材料としての労働力の量的運動にほかならないのである。

さきにみたように蓄積の過程は一般に資本の有機的構成の高度化をともなわないたんなる資本の量的増大とその高度化による質的変化のあい交替する循環の過程であるが、しかしたんなる量的増大の局面にあつても前期の循環と比較すればより高い生産方法の基礎に立つて生産規模の拡大がなされているのである。したがつて蓄積の進行は就業する労働力の絶対的増加をともないつつも、その資本の大いさに比較してはます少数の労働力を索引してゆく、ということになる。もつとも就業労働者数の絶対的増加をともなうといつても、沈滞期には以前の活況期の水準以下に蓄積がおとろえ、活況期にはいちぢるしい蓄積の進展をみせるというような螺線状の過程をたどるのであるから、この増加も他方での反撥の過程とむすびつけられているものであることに注意せねばならない。

またこのような索引と反撥との過程はいろいろな生産部面において同時的にあらはれる。すなわちある部面では資本構成の変化が労働者数の相対的減少をともないつつ、その絶対的増加として行はれるというばあいもあるであろうし、また労働者の増加が一方的になされる部面もあるであろう。あるいは集中による資本の集積が労働者の絶対的減少をひきおこす、というばあいもあるであろう。このように労働者の反撥と吸引とは資本の量とその構成のいかんによつてさまざまな

かたちでさまざまな生産部面に配分せられるのである。もちろんここでこの複雑な組あはせをひとつひとつ具体的に追ってみるなどということが無意味であることはいうまでもないことであろう。むしろここでは以上の過程の意味することをさぐるために、つぎのような歴史的過程を頭のなかでえがいてみよう。ある生産部門の機械化が拡大すれば、この部門に生産手段を供給する部門の労働の需要はいちぢるしく増加する。そしてこの増加はこの部門の機械化がなされて労働力の需要が緩漫となるまでつづくであろう。それとならんで機械化された工業部門に原料を供給する農村の分解がいつそうおしすすめられるであろう。あるいはまたこれらの工業部門に附随するいちれんの中小製造工程——旧来の生産方法にもとずく——の労働力需要も増加する。そして以上の過程の結果として国内市場や国外市場が拡大すれば、それが運輸業における労働力需要の増加をともなうということも明らかであろう。要するに資本制生産方法の発達が労働者のいちぢるしい増加をもたらしたものであることは無視できない。けれどもこの事実は遊離された生活手段が労働者に職をあたえるという『補償説』の考えを肯定するものではないことはもちろん、この説の主張するようなかたちで労働者の増加がなされたわけでもないことをしめしている。機械化された部門から反撥された労働者をもふくめた多くの労働者がたち遅れている部門に集中的に吸引されてゆき、この部門の機械化をまつてその重点はさらにより劣悪な部門におしやられるという経過をたどる。そしてこの部門もいずれは機械化の運命をみるのである。また、この過渡期において最初の犠牲者のうちに零落してしまうものがとうぜんにでてくることも想像するにかたくないことである。もちろん、あらかじめ誤解の生じないように一言しておくと、われわれはここでは蓄積の一般的法則を対象としているのであるから、このような歴史的過

程はそれじしんとしては問題とはなりえない。一般的法則を純粋に理解するためには、資本制生産様式の支配的な社会を想定せねばならないのであつて、現実の社会のなかでいまなおひろく行はれている分解の作用を具体的に考察することは法則性そのものの把握にとつてはむしろ攪乱的な意味しかもたないであろう。しかしことさらここにマルクスによる十九世紀中葉のイギリスの事例をもちだしたのは、資本制生産方法の発達が労働者の雇傭量を増大するばあいにも、それはけつして就業労働者の単純な累積としてはあらわれえないということを指摘するためである。いいかえれば機械によつて直接に反撥せられる労働者や、いままでの技術的基礎のうえでは事業の拡張にともなつてとうぜん雇傭せらるべき眼にみえない失業者のことはおいてとわないとしても、他の生産部門の追加的資本を介して雇傭せられた労働者も最初の犠牲者とおなじ運命をたどらずにすむという保証はどこにもないのである。かくしてわれわれはかかる増加はそのうちにひとつの動揺をふくむというさきと同一の結論にここでも到達するのである。ここにおいてわれわれはまた「かれら〔労働者のこと—引用者〕の労働の生産力の発達とともに……資本による労働者のより大きな索引がそのより大きな反撥とむすびつけられている規模もまた拡大され、資本の有機的組成および資本の技術的形態における変化の速さがまし、そしてあるいは同時に、あるいは交互にこの変化におそわれる生産部面の範囲が大きくなる。かくして労働者人口は、それじしんによつて生産される資本蓄積とともに、それじしんの相対的過剰化の手段をますます大量に生産する」〔前出六六四頁、訳本一三四頁。〕というマルクスの言葉を確認することができるのである。

労働者の増加がそのうちに動揺をふくんでいるということ、いいかえればその索引が反撥とむすびつけられているとい

うことはさらにすすめて考えれば、就業労働者の地位の不安をものがたるばかりでなく、逆に失業者の地位も固定したものでないことを意味するであろう。いいかえれば就業労働者の増加が単純なる雇傭量の累積でないのに対応して、失業者のそれも一方的な失業量の累積であるとはいえない。それはふたたび雇傭される可能性をもつ失業者である。もちろんこのばあい就業労働者の年齢的編成替という事情を無視するわけにはゆかない。それもたんに年長者が青年に代はられるというだけではなく、成年労働者そのものが婦人児童労働者によつてとつて代はられるという事態をもふくめてのことである。そしてこのような事態が生産方法の発展につれて重要な意味をおびてくるということも周知のことであろう。そればかりでなく失業者はかならずしもおなじ職場に復帰できるとはかぎらない。ふたたび雇傭されるとしても、より劣悪な生産条件の職場で、より劣悪な労働条件によつて雇傭されるばあいのほうがむろしふつうであろう。あるいはまた失業中に零落してしまうばあいすらきわめて多くの事例としてあるであろう。けれどもこのことは個々の労働者の地位が蓄積の進行にともなつてますます不安定化してゆく、ということを物語るものにほかならない。そしてわれわれが階級としての労働者を考察すれば失業者と就業者とが二つの固定化した範疇であるというわけにはゆかないのである。もちろん蓄積の進行とともにこの失業者のうちから固定化したパウパリスムスの数がじつさいに増加し、それが相対的過剰人口の死重となるということは否定できないであろう。しかしこれらの沈澱層は、資本の蓄積運動によつて直接に規定せられる相対的過剰人口のひとつの具体的な存在形態として過剰人口の最下層を構成しているのである。事実、これらの層の一部分は資本の搾取材料とはなりえない脱落者であつて、この層をもつて失業者を代表させるわけにはゆかないのである。いいかえれば

失業者は追加資本がこれを必要とするときにはふたたび雇傭され、ふたたび資本の蓄積に役立つ材料となるのである。このことは相対的過剰人口の存在がとりもなおさず資本の自由に処分しうる搾取材料の存在にほかならないことを意味する。現実の蓄積の過程はかかる人口の自然的制限から独立した産業予備軍の反撥と索引を基礎としてなされるのである。すなわち蓄積運動はたんに生産手段や生活手段を増加させるだけでなく、また生産方法の改善によつて剰余価値率を高めるばかりではなく、そもそもそれらの諸要因を現実たらしめる基礎を産業予備軍の形成、再形成として、その機構によつてつくりだすのである。いいかえれば労働ファンドの拡大再生産がいかなる社会にもつうずる一般的関係であることはすでにみたところであるが、資本はその運動のなかにあたえられた自然人口を包摂し、その特殊的人口法則をつくりだすことによつて、この一般的関係を資本形態により確立するのである。すなわちわれわれがはじめにみた再生産の関係が現実に成立する根拠がここにあたえられるのである。そして資本制的蓄積の一般的法則の意味もまたここにもとめることができるであろう。

資本制蓄積の「労働者階級の運命におよぼす影響」はこれまでのべたことのメダルの裏側にほかならない。さきにみたように資本の蓄積は相対的過剰人口の生産をとおして労働者を資本によつて自由に処分しうる搾取材料となし、これを利用することによつて蓄積をおしすすめるのであるが、労働力が資本によつて自由に処分しうるものとなるためには労働力そのものも実質的にそのような利用を可能ならしめるものとなつていなければならない、ということはいうまでもないことである。資本による生産方法の発展は資本への従属のもとにあつていまだ労働者にのこされていたただひとつのいわば

抵抗物である体力や熟練をかれらから奪いとることによつて、すなわちかれらの労働を無内容化することによつてこの要請に答えるのである。成年労働者の労働が婦人児童労働によつても代位されるものとなる、ということはこのことを明白にしめすものである。そしてまたこのことが同時に労働者の資本への従属の実質的基礎をなす、ということも明らかであろう。一般に労働者は価値を増殖させる手段として資本に雇傭されるのであつて、このことから本来はそうであるように労働者が生産手段を使用するのではなくて、生産手段が労働者を使用するという関係がうまれてくるのであるが、自働的な機械装置の体系の発展は現実にも労働者をこの技術的体系の附属物と化してしまい、単純化された労働力はこの体系の運動によつて技術的にも労働日の延長や労働強化を強いられうるものとなるのである。資本関係はたんに形式的に労働者を支配するものとはいえなくなる。労働者は資本に従属せざるをえないという実質的関係が労働の無内容化とともに資本関係の内部に構成せられてくるのである。

他方では資本の蓄積の機構はこの関係を基礎にして労働力を意のままに処分する。もちろん労働力も商品として需給関係により価格の変動しうることはいうまでもない。だが労働力そのものは労働者の身体を離れて存在するものでなく、その生産は労働者の個人的生活によるほかはないのであるから、資本に必要な労働力量は価格変動を通してその生産の増減により調節されるのではない。労働力の売買は一般に商品が価格変動を通して社会的労働の配分を実現するのとは異つた関係にあり、商品形態による配分じしんの基底にある。いいかえれば労働力が商品形態をとることによつてかかる配分形態が一般化するのである。むしろ問題は商品としての労働力もそれが一般的商品のように任意に増減しうるものとならな

ければこの配分形態も社会的に確立することにならないという点である。ところが相対的過剰人口の形成を基礎として労働力量は資本の価値増殖欲にたいして調節されることになるのである。労働力の供給の調節は生産の増減による代りに相対的過剰人口の生産をもつて代位されることになるのである。資本による労働力の自由な処分というのもこの意味においてはれるのであつて、またこの意味では商品としての労働力も本来の商品形態の概念で律せられるような関係が蓄積の過程のうちに展開してくるのである。かくて労働力の商品形態は実質的にも社会的にも完成してゆくのである。このことは労働者の側からみればかかれらの一般的な社会的地位の決定にほかならないであろう。人間としてではなく商品として取扱はれなくては人間としても存続しえないという関係が確立するのである。そしてその確立はなんらかの暴力によつてなされるようなものではない。本来人間の物質的富を、したがつてその生活を向上させるべきはずのものである生産方法の発展がかかる顚倒したかたちでしかあらはれえないのである。またかかる関係の確立が資本関係の確立であり、「資本の専制」のもとに従属する労働者の地位の決定であることもたやすく理解されうることである。資本の蓄積はこのように、実質的にも社会的にも労働者の地位を決定するものとして作用するのである。

資本の蓄積の一般的法則にかんするすべての問題が以上の論点につきる、というわけではけつしてない。それはつぎにのべる貧困化理論の検討をとおしてそのつど取扱いたいと思う。しかしここで以上の要約として指摘しておきたいことは、端的にいつて、いわゆる貧困化理論を以てこの問題の主題となすことに対する疑問である。もちろん労働者階級の状態を歴史的具体的に分析するということがそれじしんひとつの重要な問題であることはなんびともこれを否定しないであ

ろう。また、そのばあいにいわゆる貧困化がどのようなかたちであらはれるか、という実証が中心的課題のひとつとなるということを否定するものでもけつしてない。けれども貧困化理論を問題の中心にすえることから、もし労働者の生活状態の悪化が論証されなければ蓄積の一般的法則の説明にはならないという議論をなすならば、あるいはすでにそのような結論を前提において具体的分析をすすめるならばそれは問題であろう。そのような論理は現実に労働者階級の状態が改善されたから蓄積法則はなりたたない、というあのベルンシュタインの論理の裏側にすぎない。またもしそのような論理を固執するならば修正主義すらもぢゆうぶんに批判することができないであろう。すでにのべたように一般的法則は資本論第一巻の総括的規定として、資本制生産過程の反覆のうちに、そこにふくまれている資本の本質的関係が社会的に確立してゆく過程を論じているのである。「蓄積を抽象的に、すなわちたんなる直接的生産過程の要因」（前出第一巻五九三頁、訳本第四分冊八頁）として考察するということは、流通の媒介運動や剰余価値の分割を度外視するというだけではなく背後にこの意味もふくめてのことであろう。法則性は生活状態の向上によつて否定せられるようなものではけつしてないのである。プロメテウスを岩に釘づけにするヘファイストスのくさびはもつと強靱のものであろう。けれどもいまはこれ以上この点について説明をくわえる必要はあるまい。これだけのことをあらかじめ指摘しておいてからつぎにすすみたいと思う。

（未　完）

注。以上の諸点において宇野弘蔵教授の諸著よりいくたのしさをえた。記して謝意を表したい。